

佐藤 信夫 ・日本フィギュアスケートインストラクター協会 会長
池内 啓三 ・理事長



日本を代表する数多くのスケーターを指導してきたフィギュアスケートコーチ・佐藤信夫氏は、関西大学第一高等学校、関西大学在学中に2度のオリンピック出場を果たし、全日本選手権10連覇を達成した名選手でもあった。選手として、コーチとして半世紀以上をわたって、トップアスリートの世界に身を置いてきた同氏と、関西大学体育会バスケットボール部で選手・コーチ・監督の経験もある池内啓三理事長が、大学におけるスポーツの魅力と意義について語り合った。

目標達成に向けて、打ち込む青春

学生スポーツの魅力と意義 「なぜ、あなたはスポーツをするのか？」を問う

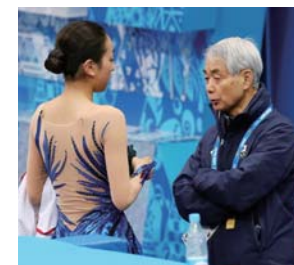
◆ソチオリンピックでの浅田真央選手の演技を見守った心情は

池内 ソチオリンピックの浅田選手のフリープログラムの演技は、前日のショートプログラム16位というショックな結果から、見事に立ち直って素晴らしいスケートを見せられたことに大変感動しました。コーチとしてリンクサイドで演技をご覧になっている時はどのようなお気持ちでしたか？

佐藤 指導する選手の演技の間は、足が震えて、手すりを握っていないと立ってられないことがよくあります。しかし、あの時は私も開き直って、とても冷静でした。

池内 本学の選手が出場した男子の演技では、学内で深夜に中継を見ながら声援を送る応援会があり、私もかなり熱くなりました。佐藤先輩は大学の後輩に当たる高橋大輔さん、織田信成さん、町田樹さんなどの男子選手をどのように見ておられますか？

佐藤 彼らがまだ子供だったころから知っていますので、あそこまで高いレベルに到達することができたのかと感嘆しています。特に、織田さんが世界ジュニア選手権の代表に選出されなかった時に、大変残念がっておられたお母さんに「今まで通り練習を続けていれば、必ず時機が来ますから」と声を掛けたのを思い出します。



▲浅田真央選手を指導する佐藤さん

◆日本フィギュアスケート躍進と関西大学アイスアリーナ

池内 日本ではなぜ、これほどフィギュアスケートが盛んになったのでしょうか？

佐藤 激しい競争の中で、日本の選手たちが切磋琢磨してきたことがやはり一番大きな要因だと思います。戦後、アメリカが圧倒的に強い時代が長く続きました。その背景として、アメリカでは各地にリンクがあり、大勢の人たちがスケートを楽しむ土壌があったことが考えられます。そのアメリカの後を追ったのが、国の力で競技の強化を図ったソビエト連邦や東欧諸国でした。一方、日本には競技のための高度な練習ができるリンクがほとんどありませんでした。やはり、良い状態のリンクを独占して使用できる環境がないと、世界レベルの選手はなかなか育ちません。日本のフィギュアスケートが強くなった背景には、関西大学がスケートリンクを所有しているように、トップスケーターが思う存分に練習できる環境が整備されたことがあると思います。関西大学がアイスアリーナを建設された意義は非常に大きかったと思います。

池内 アイスアリーナは高橋さんが文学部2年次生、織田さんが1年次生の時に、体育会アイススケート部が練習場になっていた民間のスケートリンクが閉鎖されることになったのを契機に、当時の森本靖一郎理事長が建設を決断しました。佐藤先輩の学生時代は、練習はどこでされていたのですか？

佐藤 難波にあった大阪球場のスケートリンクです。朝6時か

ら7時半まで練習してから、千里山の学校に登校し、授業が終わったらまたリンクに戻って練習。そして、夜遅くに家路に就く。「いつ勉強しているの？」という毎日です。最近の選手にも負けないだけの練習量でしたが、効果的な練習はなかなかできませんでした。私たちのころは、朝行くと水滴でリンクにこぶができていて、選手が削らなければなりません。その後、水をまくよう整水係の方にお願ひし、表面が滑らかに凍るのを待ってから練習開始でした。練習を始めたと思うと、すぐに学校へ行く時間になってしまったものです。



現役時代の佐藤さん
【関西大学年史編集室蔵】

池内 大学のリンクができて、フィギュアスケートだけでなく、アイスホッケー部も強くなりました。アイスアリーナではガスを活用した効率の良い新しい技術で氷を作っていますが、真夏にはフル稼働は避けられませんが、年間を通して練習できる状態を保つのはやはり苦勞があります。しかし、せっかく良い環境があるのですから、できる限り使ってもらおうと、地元地域や他大学にも開放しています。コーチ陣にはそれぞれジュニアの指導もしていただいています。

◆学業との両立こそ大学スポーツの良さ

佐藤 私が学生のころは、関西大学には強いクラブがたくさんありましたが、現在はどうですか？

池内 私は佐藤先輩の1つ下の学年でほぼ同世代、ちょうど東京オリンピック前後になります。当時本学には運動部が約40あり、半数が関西一になっていましたね。私が在籍したバスケットボール部も私が1年次生の時に優勝しました。しかし、その後は新設大学も増え、スポーツで大学の知名度を高めるという狙いで強化を図る大学が徐々に増えた一方、本学では大学紛争を経て、スポーツ推薦入試がなくなりました。そこから、本学のスポーツの成績は低迷していきました。同様に関西学院大学でもスポーツ推薦入試がなくなりました。両校の体育会が良きライバルとして対戦し、親睦を深める総合関関戦は、そういう状況の中で何か刺激になることをやらなくてはいけないと、OBの方々と協議して作ったイベントで、1978年から始まり、今年で37回目を迎えました。また、2000年ごろからスポーツ推薦入試制度も復活し、スポーツにも強い関西大学にしようという声が高まり、現在に至っています。

本学では、それぞれの競技成績だけが良ければいいというのではなく、選手が学生としてしっかり学業も修めることを重視しています。文武を両立させるため、大変な努力をしながらさまざまな世界を見ることで視野を広げ、その上で勝負にもこだわりながら自分を高めてほしいと考えています。

■対談



佐藤 信夫 (さとう のぶお)
1942年大阪市生まれ。日本フィギュアスケートインストラクター協会会長。60年関西大学第一高等学校卒業。64年関西大学経済学部を卒業し、株式会社国土計画(現プリンスホテル)に入社。男子シングルのフィギュアスケート選手として、60年スノーバレーオリンピック14位、64年インスブルックオリンピック8位。57年から全日本選手権10連覇。世界選手権6大会出場(最高位4位)。コーチに転身後は、佐野稔、荒川静香、村主章枝、安藤美姫、浅田真央、小塚崇彦など多数を指導。2010年世界フィギュアスケート殿堂入り。新横浜スケートセンターで、同じ関西大学卒のトップスケーターだった久美子夫人と二人三脚で指導にあたる。著書に「君なら翔べろ！」(双葉社)。

悩ましいのは就職活動です。2015年度卒業の学生から、就職活動の解禁時期がこれまでより3カ月遅くなることになりましたが、それでも3年次生の後半になると準備を始めなければなりません。学内でのガイダンスへの参加をはじめ、自己分析や筆記試験対策もしなければなりません。企業側の採用活動が解禁になると、昼間は学外でのセミナーに参加し、夜には何十社ものエントリーシートを書かなければなりません。4年次生になるころには面接に呼ばれ、時には東京まで1日かけて行くこともあるようです。当然そうすると、部活動の時間は少なくなってしまいます。割り切って就職活動に専念する学生であれば、進路についてじっくり考えることができますが、中には部活動を頑張りたいがために就職活動に身が入らず、進路について熟考できない学生もいるようです。どちらも中途半端になってしまうのは元も子もありません。佐藤先輩は、選手の進路や将来設計については、どのようなご指導をされているのですか？

佐藤 私はどの道を選ぶか、後悔しないようにじっくり時間をかけて考えないと常に言っています。だから、何が何でもスケート最優先、練習を休んだら許さないと無理やり練習させることはありません。スケートを続けた場合、スケート以外の道を選んだ場合の両方を説明し、ご家族の方を含め一緒に考えるようにしています。

1人の選手、1人の人間の1回しかない人生にかかわり合うことになった責任は、ものすごく重いものだと思います。ですから、相手がどんな方であろうと、自分の能力の限り親身になって接していきたいと常に思っています。

池内 優れた選手であっても一生現役を続けるわけにはいきませんから、将来設計を考えることは絶対に必要です。ただ、社会に出て役に立たないから、スポーツをやるのは無駄と考えるとほしくはありません。

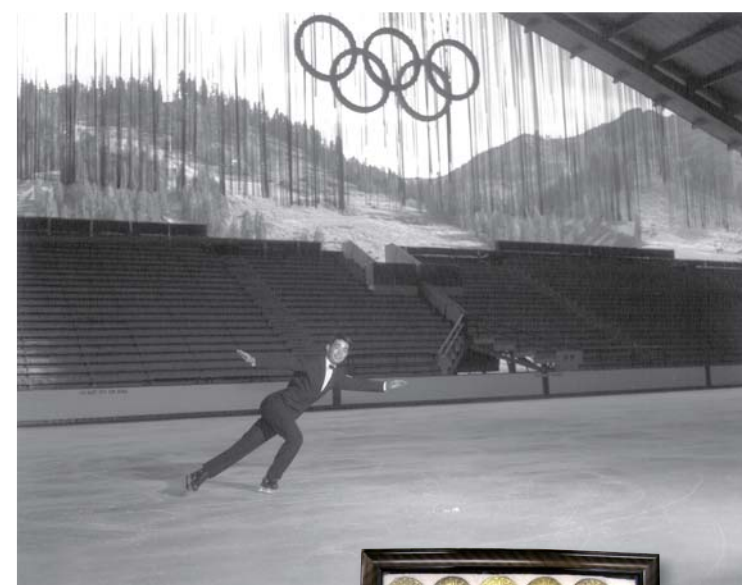
学業だけでなく、スポーツやアルバイトなどを通して得た経験は社会に出た時にプラスになります。大学でスポーツをする意義の1つはそこにあると思います。学業もスポーツも両立させ、就職活動もしっかりとする学生の良さを企業は評価します。これらの両立に苦労するという経験も、それはそれで意味があるのではないのでしょうか。

◆スポーツに対する社会の認識が変わった

池内 佐藤先輩は全日本選手権制覇を続けられていたにもかかわらず、大学卒業時に競技生活をやめるつもりだったそうですね。

佐藤 ええ。父は普通のサラリーマンでしたし、大学を卒業した後も、親に負担をかけるわけにはいかないと考えていました。当時は今と違って、アマチュア選手が活動資金の寄付を募ることもできません。10円でも誰かから援助を受けたら、その時点でアマチュア規定に違反することになり、オリンピックにも出られなくなってしまうことを意味しました。卒業後もアマチュア選手として、親の支援を受けながらスケートを続けることは、私にとって現実的ではありませんでした。

就職活動をしようかと考えていたところに、国土計画という企業が声をかけてくれたので、普通に働くつもりで就職しました。ところが、入社してみると「君はスケートをするためにここへ来たんだよ」と言われたのです。そして、社会人になってからも競技生活を続けることになりました。今度は朝リンクへ



▲スノーバレーオリンピック会場での佐藤さん
全日本フィギュアスケート大会などで獲得したメダルの数々▶
[いずれも関西大学年史編集室蔵]

練習に行き、次は陸上のトレーニング、夕方から尼崎のボウリング場で働いて、夜10時ごろに帰宅するという生活でした。

池内 オリンピックには何回行かれたのですか？

佐藤 選手としては、関大一高時代に1回、関西大学時代に1回。社会人になってコーチとして9回です。全部で11回です。この間に、スポーツを取り巻く社会環境やアマチュア規定など考え方も随分変わりました。今の考え方に切り替えない限り、オリンピックで金メダルなんて話は100%あり得ません。スケートの技術もどんどん進歩しましたが、教える内容が変わっても、コーチとして選手への接し方は基本的に変わりません。スポーツに対する考え方の変化に対応して、頭を切り替えることが私には大変でした。

池内 フィギュアスケートでは1人の選手に複数のコーチが付きましますね。

佐藤 それも、大きく変わったことの1つです。私が選手のころは、1人の先生にすべてをお任せしていましたが、今は10人程のコーチやスタッフが付くことも珍しくありません。スケートを教える人、試合用の音楽を作る人、編集する人、振付師、筋力強化や柔軟性のトレーニングを指導する人、練習後に体のケアを行うトレーナー、医師や精神科医、栄養士、これらのチームをまとめるマネージャー。アイスショーへの出演や企業からの支援などにより、これだけの人を抱えても何とか成り立っていけるといって良いでしょう。

池内 例えば、サッカーなら監督、コーチ、スタッフ10人程で、数十人の選手の面倒を見ます。しかし、フィギュアスケートの場合は関西大学アイススケート部として選手を指導するのではなく、各選手にそれぞれのチームがあり、従来の学生スポーツからすると特殊です。仮に今後、有望な選手が一挙に入部した場合にどう対応していくのが良いかなど、大学として時代の変化に応じた新たな対応を考えていかなければいけないと思っています。

◆選手の人生に関わる責任の重さを意識する

佐藤 スケート界の一員として、関西大学の取り組みには大変感謝しています。スポーツ全般についても、関西大学がこれからも盛り上げてくれることを期待しています。

池内 スポーツにはプレーする選手だけでなく、多くの人の注目を集め、巻き込んでいく力があります。多くの学生にとって、スポーツで活躍する人が同じ大学で学んでいることは、さまざまな良い波及効果が期待できます。私たちとしても、本学のスポーツがますます盛んになるために積極的に取り組んでいきます。

現在、大学日本一などの実績や伝統があるアイススケート部、アイスホッケー部、アメリカンフットボール部、サッカー部、野球部、ラグビー部、陸上競技部(駅伝)の7つを最重点強化クラブとして支援し、次のステップとして、その他のクラブは、3つの層に分けて強化を図っていくことを考えています。

どのクラブにも「今年は関西一になる」など、具体的な目標を掲げて練習に励んでほしいと思います。勝ち負けだけではなく、目標達成に向けて、自ら努力することに学生スポーツの良さがあります。監督やコーチにやらされているは駄目です。大学生

本学では、選手が学生としてしっかり学業も修めることを重視しています。文武を両立させるため、大変な努力をしながら、さまざまな世界を見ることで視野を広げ、その上で勝負にもこだわりながら自分を高めてほしいと考えています。



池内 啓三 (いけうち けいぞう)
1943年旧満州(中国東北部)生まれ。46年日本に引き揚げ、大阪府に住む。65年関西大学文学部新聞学科を卒業し、学校法人関西大学に奉職。92年評議員、96年総務局長、2000年理事。法人本部長、常務理事、関西大学幼稚園長を経て、08年学校法人関西大学専務理事。12年理事長に就任。大学在学中はバスケットボール部で活躍。卒業後もコーチ、監督として関わった。

なので、練習方法も含めて、自分たちで考えて取り組むことが大切です。その点、佐藤先輩は選手のやる気を引き出すのがうまいのではないかと考えているのですが、いかがですか？

佐藤 教え子たちにはそれぞれ、小学生のころから機会を見つけて「なぜ、あなたはスポーツをするの？」ということから、話を解きほぐして「やるからには、自分が頑張るしかない。自分で考えなければいけない」ということを技術的な指導と並行して認識させています。強引に教え込んで技を身に付けさせることはできるかもしれないけれど、それでは必ず途中で壁にぶつかって、先に進めなくなります。「自分がやりたいからやっているんだ。そのために苦労するんだ。工夫するんだ」ということを理解させることが重要です。

池内 佐藤先輩は、これからももちろん指導者を続けていかれますよね。

佐藤 教えてほしいという方が1人でもおられる限りは続けたいと思います。

池内 コーチとして、特に大事にされていることはありますか？

佐藤 1人の選手、1人の人間の1回しかない人生にかかわり合うことになった責任は、ものすごく重いものだと思います。ですから、相手がどんな方であろうと、自分の能力の限り親身になって接していきたいと常に思っています。